

## 国語教材をとらえ直す

筑波大学附属駒場中学校・高等学校 国語科

石川祐爾・鹽谷 健・鈴木信好  
須藤 敬・関口隆一・平田知之  
福田 孝

## 国語教材をとらえ直す

筑波大学附属駒場中学校・高等学校 国語科

石川祐爾・鹽谷 健・鈴木信好  
須藤 敬・関口隆一・平田知之  
福田 孝

本校国語科では、新学習指導要領の実施をふまえて、平成12年度より3年計画で、「国語教材をとらえ直す」のテーマで、伝統的な教材、其の指導法の検討実践を行ってきた。

この研究で、従来の教材の取り扱い方を様々な角度からとらえ直したり、伝統的な教材やその取り扱いについて検討したり、新しい教材を開発したりしてみた。

本論集では、第3年度(平成14年度)の実践として行った本校教育研究会の公開授業と、3年間のまとめとを報告する

キーワード：授業数減少 伝統教材定番教材 教材連関 自作実作

### 1. はじめに

平成14年度より始まった中学の新学習指導要領、及び15年度より学年進行で始まった高校の新学習指導要領の実施に伴うカリキュラムの再編により、国語の時間数は従来よりもさらに減少することとなった。また、それに伴う教材の見直しと精選とが求められているのも周知の通りである。そこで、本校ではこの機会に、従来授業で扱われてきた伝統的・定番的な教材の価値や、その取り扱い方・指導法についての見直しを研究テーマに掲げ、検討実践を行うこととした。

その一部は、毎年行われている本校の教育研究会の公開授業という形で披露し、外部からの参加者による意見や助言講師からの指導を受けて検討の参考になっている。

平成12、13年度の公開授業については、昨年度の論集に報告してあるが、其の授業者・教材名・対象学年は以下の通りである。

- 12年度・関口隆一・『故郷』・中学3年
- 12年度・平田知之・『源氏物語』・高校3年
- 13年度・福田 孝・『枕草子』・中学3年
- 13年度・須藤 敬・『大鏡』・高校2年

### 2. 平成14年度(中学校)の試みについての検討

今回取り上げた教材は、その扱いについて、授業者の側で事前に留意し、とくに明確な態度決定をしておかなければならない点がある。

まず以下にその点について整理をしておきたい。

#### (1) 第1点 時代設定

舞台は江戸時代の京都である。壬生狂言で使う「盗人面」を創ると言うことで、京都の地域性も重要な点であるが、作品の中での具体性はそれほどないと考えられるので、江戸時代の(京都)時代性(歴史的背景)をどこまで考えるか。

社会的制度に関する知識と生活の実態の理解が読みの内容に大きく関わっている。

#### (2) 第2点 主人公の「文吉」は面打ち師である。

この職業の特殊性をどこまで説明するか。とくに最後の場面の文吉の決心(面を打ち直すこと)との関係でその受け止め方、小説としての首尾の評価に大きな関わりを持つ。

#### (3) 第3点

第二点と関係する問題であるが、「文吉」の「盗人面」制作中の内面描写を「芸術制作」と考え得るのか。つまり、作者の作品全体の意図の把握に関する捉え方が変わってくる。

これらの点は、現代の作者が歴史的に時間を遡る作品を書いているということによるのであるが、現代の  
ると考える。

#### (4) まとめ

1. 小説教材として、読みの様々な面を扱うとき、  
対応可能である。

2. 授業者の側の視点・観点の事前の方針が大切で  
ある。

3. 現代からみて、時代性をどう考えるかという点  
で、古典に授業とそこで扱う教材の意味を考察する一  
つの指標となるか。

4. 中学校で生徒が初めて小説を読むとき、内容(ス  
トーリー)の平明さは1.との関係でよいかと考える。

### 3. 平成14年度(高校)の試みについての検討

四言句自作は今回が初めての実践であった。結果的  
に効果のある学習法であると考えられる。添削を通じて  
実感した所では、其の最大のもの、漢語の語順理解  
が深まったことである。外に、故事成語の関心が増し  
たこと、七言句の解釈がし易くなったことも挙げられ  
る。今後とも教材の一環として継続を考えてみる。更  
には、四言句という条件の下で季節感を表現しようと  
することは、漢詩文を離れて、日常の挨拶文にも役立  
ち、俳句の鑑賞へも繋ぎ得るものと考えられる。

高等学校の詩の学習としては、唐詩を中心として近  
体詩が其の圧倒的比重を占めるのであろう。しかし、  
近体詩に至る詩史を無視して、独り近体詩のみを学習  
するのでは充分とは謂へない。そこで、教材選定の順  
を次の如く考える。まずは、漢語の本質より生ずる四  
言句、其の四言句が中心たる最古の詩集「詩経」。次に、  
四言句の本質より踏み出た五言句誕生の「古詩十九詩」。  
そして、七言句を含む近体詩。今回の授業は「詩経」に  
当たる。

古典は古ければ古い程読解は難しい。だからといっ  
て、古文で「万葉集」は無視できない。そこで、「詩経」  
においては、一字一句の解釈は求めず、次のことを主  
として理解させたい。最古の詩集たること、孔子が編  
纂したとする所以、一句四言であること。今回の授業  
は、一句四言に当たる。

四言句は漢語の本質より生ずるものであり、故事成  
語には四言句が多いし、四字熟語辞典もある程である。  
また、四言は近体詩七言句の上半分の四言とも対応す  
る要素が充分にある。従って、四言句を学習すること  
は、独り「詩経」を知ることを超えて、広く意義有るこ  
とと考えられる。

更には、僅か四文字ではあるが、四言句を自作させ  
ることで、主述の関係、修飾の関係、動詞一客語の関  
係の理解を確実にさせる効用があると考えている。漢  
語の此の関係の理解は、全ての作品読解にも不可欠で  
ある。今回の授業は四言句自作課題の直前で、四字の  
故事成語を使って其の意義を講ずる授業に当たる。

### 4. まとめと今後の展望

3年間の公開授業で扱った教材は、いわゆる伝統教  
材定番教材である。14年度中学1年の「ぬすびと面」は  
珍しい作品であるが、本校採用の教科書所載作品では  
ある。

「国語教材をとらえ直す」とは、必ずしも伝統教材、  
定番教材の排除不採用を意味するものではない。新学  
習指導要領による授業数減少などより、教材をどのよ  
うに設定すべきか、伝統教材定番教材の扱い方を含め  
てとらえ直そうとするものである。

学校の授業で扱う作品読解は、其の模範、方法を学  
ばせるものであって、それで完結するものでないこと  
は明らかであり、授業の後も、古典を含めて生徒自身  
が読書として生かしてゆくものでなくてはならない。  
また、授業数減少に対応して、生徒の自学自習の意欲  
を増すものでなくてはならない。

授業に当たっては作品選定の前に、短期的長期的計  
画があつて然るべきであろう。作品が先に在って授業  
があるのではない。公開授業に即していえば、心理描  
写とは何か、小説の結構とは何か、古典とは何か、和  
文とは何か、歴史記述とは何か、詩句とは何か等等、  
それぞれの設定に応じて作品選定してある。

伝統教材定番教材は、取り敢えず読解してゆけば、  
授業が成り立つような力がある。其の所以には典型性  
と多様性とがあると思われる。古典作品であれば文学  
史的価値も高い。何より生徒も知る有名作品である。  
そこで自ら特定の作品が伝統化定番化してきたのであ  
らう。

このことは教科書教材をみれば明らかである。今日  
まで数回の学習指導要領改定、そして今回の改定を含  
めて、教科書所載の作品に決定的変化があるとは思え  
ない。古典では変化無しと言っても差し支え無いであ  
らうし、現代文においても大差は無い。鴎外の「舞姫」  
に現代語訳を付して採用する教科書もある。中学校に  
しても、一新したと言う程の変化とはいえない。学校  
を離れても、昨今は文学作品の暗誦を提唱する声が大  
きいし、「坊ちゃん」「山椒太夫」を夕刊に連載する新聞  
もある程である。

典型性多様性があるということは、他教材への連関が豊かであるということになる。或る特定の観点からの読解を繋ぐことも、特定の観点へ繋ぐことも可能である。ここには伝統教材定番教材の価値がある。力がある。此の前後の連関を十分に生かした教材設定を考えてゆくべきではあるまいか。「ぬすびと面」では、O・ヘンリーの「20年後」、椎名誠の「岳物語」、またビデオを用いて取り組んでみた。古典漢文では生徒の実作を入れてみた。

伝統教材定番教材の寿命が長いということは、自動的に其の作品と当代生徒との時間距離が遠くなる。それを繋ぐために教師の指導を要する。公開授業の「ぬすびと面」で指摘する所である。前論集においても「故郷」に指摘があった。古典では言うまでもないことである。

此の点にも他教材との連関を生かせるであろう。例えば、13年度の「大鏡」で、歴史記述の連関から野家啓一の「物語の哲学―柳田國男と歴史の発見」を併読した。

文学史的価値が高く、有名作品であれば生徒にとっては意欲が湧こうし、読了感も悪くはないであろう。

伝統教材定番教材を独立して扱うよりも、諸観点から総合力をもつ伝統定番教材へ、伝統定番教材から他作品へ、或いは日常の読書へ発展させるように生かしてゆくべきであると思う。其の連関のために実作の方法もなお検討してみたい。また、長く教科書に採用された作品の外にも有効な作品を探し出せるのかも知れない。中学高校ともに、現代文では其の可能性は小さくないように思われる。そして其の作品は伝統定番教材となってゆくのであろう。

## 第二十九回筑波大学附属駒場中・高等学校教育研究会資料

### 〈中学校〉 指導案

〔日時〕 平成十四年十一月二十九日金曜日 第一校時

〔教場〕 本校七号館オープンスペース

〔対象〕 本校中学校一年A組 男子四十一名

〔担当〕 本校国語科教官 鈴木 信好

〔教材〕 「ぬすびと面」 吉橋通夫(学校図書)

〔研究題目〕 国語教材をとらへ直す——小説教材の扱い方を考える——

〔研究題目設定理由〕 小説教材を教室で扱う目的は、生徒各個人の将来に渡る読書生活のための読みの基本を形成することであろう。

教室での授業の意味はいくつかの面から考えられる。

ひとつは、言語表現としての作品である限り、個人の恣意的な読みが許されないこととその意識を明確にすることである。正しい読みと言うことになる。さらに、書かれていないが明らかに読まねばならない場合、知識として持っていないことで誤読が生じる場合があることなども理解させねばならない。

また、この基本的な読みの上に、自分とは異なる読み、多様性を知ることができると。自己の読みを客観化することでの自己認識となり、さらには作品の登場人物・内容を含めた人間認識に繋がる読書体験が実現できれば理想であろう。

本を読むことは個人の問題ではあるが、どの分野であろうと、国語的な訓練が無いままでは読み、考えることは難しい。また、正しい読みに至る過程が迂遠なものとなったり、話の流れ(筋・展開)を追うことが中心になるなど、結果として読むことの意味や楽しさを知ることができないこととなる。

中学校一年生の段階でどこまでの指導が適当か可能かは、集団であるため個人差があり難しいことであるが、以上のようなことを考えてこの授業を試みた。

〔授業展開〕 全十六時間

第一時 本文の読み・生徒からの質問

第二時 生徒からの質問・生徒への質問(江戸時代の社会背景Ⅰ)

・江戸時代の長屋生活

第三時 小説について(作者・現実との関係Ⅰ)・感想文(宿題)

・作者の意図(全体↓作品と表現(部分))

・部分と部分

・文吉の評判の良さ↑外部の評価(面の実用性)↓舞台上の働き

第四時 「二〇年後」 O・ヘンリー(第一時)(小説の読みと背景としての現実)

・現実社会と小説(嘘)

・読者の反応

「面白い」↓「なぜ」↓自分が分かる

↓読みの深まり

第五時 「二〇年後」 O・ヘンリー(第二時)(語り手の在り方と人称の働き)

・「語り手」の意味(定義)

・一人称と三人称の違い(岳物語)

「私の嘘」(現実の不保証)と語り手(三人称)の保証↓読者の読みの確定(第一次)

第六時 「二〇年後」 ○・ヘンリー(第三時)(意味の変化・物語の進行)

・その場での意味 必然の読み、知識による読み

・後で分かる意味(伏線)

・個人の読み(小説全体)

第七時 「二〇年後」 ○・ヘンリー(第四時)(まとめ)

・意味の変化 伏線などの働き

・読みの確定(読書のおもしろさ)

第八時 文吉の年齢(江戸時代の社会背景Ⅱ・知識と読み)

・江戸時代の庶民生活

第九時 ビデオ

・面の働き(般若の面の実際の働きⅡ具体的な経験)

第十時 作品(小説と現実・面うち師の仕事など)

・表現の真実性(作者の伝達したいことと社会的な事実)

第十一時 小説と事実の違いを読者としてどう受け止めるか。

「作業の工程」と「精神的・内面的取り組み及び意識」の両面から

第十二時 面打ち師の仕事とその芸術性(現代的側面)の理解

・小説内部での主人公(文吉)変化(表現とその意味)

第十三時 ぬすつとの顔と面打ち師としての文吉の仕事

第十四時 第十一時との関連で文吉の変化を小説の時代において考える。

文体と表現意図・表現内容

第十五時 日本語の表現について(主語の扱いと表現効果)

作者の意図についての考察(作品についての批判)

・伝蔵についての分析

・面の働き(舞台上Ⅱ演じられての評価)

第十六時 生徒の小説についての見方・授業についての見方の整理

【関連教材】 椎名 誠

「二〇年後」 ○・ヘンリー

【資料】 「能と狂言」Ⅱ・Ⅲ ——音と映像による日本古典芸能体系——(日本ビクター)

・壬生大念仏狂言「道成寺」

・狂言「棒縛り」

「壬生狂言」(写真集) 荒井 保男(泰流社)

「能面入門」 金春 信高・増田 正造・北澤三次郎(平凡社)

〈高等学校〉 指導案 (原文は旧漢字)

〔日時〕 平成十四年十一月二十九日金曜日 第二校時

〔教場〕 本校七号館オープンスペース

〔対象〕 本校高等学校一年四組 男子四十一名

〔担当〕 本校国語科教官(古典漢文担当) 塩谷 健

〔教材〕

〔研究題目〕 国語教材をとらへ直す

〔研究題目設定理由〕 教科書所載の漢詩文を読む事に充分意味は有る。従つて作品選択を根本的にとらへ直すとするのではない。註無くして生徒の自力のみでは読解し得えないであらう漢文を真に理解させる為に、何如なる目標を以て、何如なる根拠から、何如なる間合ひで、何如なる教材を選定すべきかを改めてとらへ直すかと考へてみた。

古典漢文と現実の生徒との乖離は著しい。漢文は自力読解が難しく、作品との時間距離が遠く、又明日直ぐに役立つ訳でも無い。又、典故を其の最大の特徴の一とする漢文であるにも関わらず、生徒は益す古典知識に不足し漢語彙に貧弱である。而るに訓読を以て漢詩文を多読するのみで真の理解となるのであらうか。「論語」を読むにして生徒に君子の存在実感が有らうか。「史記」にしていればかりか歴史意識を有するのか。唐詩に離別望郷は頻出するが、離別の悲しみ、望郷の思ひを感じること幾何可有らん。天命不易、慨世憂國、隱逸孤高を知るであらうか。加へて、生理的にも学習態度に於ても辛抱が足らず、向学心も知的欲求も希薄になつてゐる。入試を前提とする生徒に対しても、逐語通釈を講じたり、文法を形式化して講じたりしてみせても、凡そ漢詩文鑑賞読解たり得ない。教授して何の意味も無い。講じて読解させる授業は殆んど授業として成り立たないのではあるまいか。

しかし本来、「論語」から人間の存り方を、「史記」から歴史記述を、詩から情感を考へさせるのが漢文の授業なのであらう。ところが其の漢文が読解し難い。それでも作品読解無き漢文の授業は無い。何如にして読解する事に、作品其の者に興味を抱かせ得るのか。興味を抜き出して楽しく鑑賞読解する授業にしてゆかなければならない。

漢文と生徒との距離を近づける為に、興味を抱かせる為には、先づは漢字其の者に興味を抱かせねばならない。そこで漢和辞典を教材として、形音義の観点より漢字に就いて講じてゐる。次に、漢語の構造の基本、即ち語順に就いて理解させなければならぬ。そこで二字熟語、成句、名言、笑話を教材として、読解の基礎たる訓読に取り組んでゐる。そして愈よ、作品鑑賞読解を進めるに当たつて、読み易き者、其の典型として短き作品、其の典型として四五七言句からなる詩より始めてゆく。そこに四言句自作を試行してみる。

漢詩文鑑賞読解に於ては、鑑賞読解の先に其の作品を以て考へさせたい所の者を明らかにしなければ、興味は湧かないであらうと思ふ。それが為には教材研究を一層深め、連関ある作品選定を考へなければならぬ。

〔年間指導計画〕 一二年次は必修科目、三年次は自由選択科目。授業時数は各年次とも一週一時間。

一年次 漢字、漢和辞典、訓読基礎 **漢詩(韻)** 詩史、鑑賞

二年次 漢詩(鑑賞、翻訳・辞賦、小説、散文名作、漢籍概観、史書

三年次 思想書(儒家、法家、道家、……)

〔漢詩指導計画〕 漢詩の正しき鑑賞力養成を目標として、約二十時間(高校二年第一学期末まで)の授業と課題とに拠る。

第一時 韻、韻文の散文

第二時 詩史(詩型、「詩経」)

第三時(本時) 「詩経」、四言句

第四時 詩史(五七言句の誕生、漢語音韻の研究)

第五時 詩史(近体詩の成立)

第六時 近体詩鑑賞(以後「近体詩百選」(本校国語科編集を教材とす)

近体詩鑑賞(七言句試作)

第二十時 近体詩鑑賞(七絶翻訳)

「本時」最古の詩集たる「詩経」は概ね四言の偶数句から成る。これは、絶句律詩が五言七言から成るのとは異なるが、漢語の本質に拠る所であれば、理解させおくべき事である。また、四言句は、生徒が漢文に由来する国語知識として比較的よく知る故事成語にも多く有る。漢語の本質に由来する四言句を理解させ、近体詩鑑賞に繋げ、併せて語順の理解を確実にさせたい。興味喚起の為に四言句自作を試行してみる。

「教材」 「詩経」(教科書(右文書院「国語I」)、明治書院刊「中国思想文学通史」)、自作教材。

「教材設定理由」 漢文の授業に詩を取り上げる事には論を俟たない。漢文学史を一言にして蔽へば漢文唐詩宋詞元曲となる事より、詩では唐代に完成したる近体詩が中心とはなるが、詩の歴史に触れておく事には大いに意味が有ると考へてゐる。漢詩のみならず、科学的分野に於てさへ其の歴史的経緯を理解する事には意味が有り、必要と考へる。詩史の第一、最古の詩集たる「詩経」は四言句中心にして近体詩は五七言句である。偶数句より奇数句への進展は詩史に於て欠かせない。「詩経鑑賞」の意義、四言句自作の意義を三点から考へてゐる。一に最古の詩集たる「詩経」は四言句である事。二に今後必修すべし七言句の上四言に通ずる事。三に短い字数の中で語順の理解に役立つ事。取り分け語順の確実なる理解は読解より作文に存ると確信する。

「参考文献」 「中国文学史」(内田泉之助著、明治書院)

「中国文学史序説」(前野直彬著、東京大学出版會) 「中国文学史」(同前)

「中国詩歌原論」(松浦友久著、大修館書店)

「中国詩史」(吉川幸次郎著、「筑摩叢書9495」)

「詩経 上下」(高田眞治著、集英社「漢詩大」系12)

「詩経 上中下」(石川忠久監修、明治書院「新釈漢文大系110111112」)

「漢詩」(向 嶋成美他編著、大修館「漢文名作選第2集」)

「詩経」(乾一夫著、明治書院、「中国の名 詩鑑賞1」)

「詩経」(海音寺潮五郎訳著、中央公論文庫)

「四字熟語・成 句辞典」(竹 田晃編著、講談社刊)

## 教材

一 韻(↓2頁・押韻<sup>あしん</sup>)

(一) 漢字は全て一音節で声母と韻母とからなる。

(二) 漢字には四声がある。

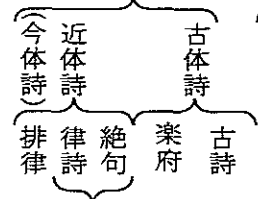
(三) 韻母と四声とが合はさつて声調となる↓韻。



二 漢籍分類

散文 〓 無押韻  
表、記、銘、書、…  
韻文 〓 有押韻  
詩、辭、賦、樂府、詞

三 詩型 詩



一句は五言か七言かのみ。「近體詩百選」にて今後鑑賞。

四 詩史

(一) 「詩経」

(1) 最古の詩集

(2) 一句四言 〓 二言 〓 二言 〓 二字 〓 一語 〓 漢語の本質

(3) 押韻せり 〓 特定箇処を同声調 (〓 同韻) とする。

〇 魏風 碩鼠 ※※#は押韻箇処を示す

碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠
無・食・我	無・食・我	無・食・我	無・食・我	無・食・我	無・食・我
黍・三	黍・三	黍・三	黍・三	黍・三	黍・三
貫・女	貫・女	貫・女	貫・女	貫・女	貫・女
莫・我	莫・我	莫・我	莫・我	莫・我	莫・我
肯・顧	肯・顧	肯・顧	肯・顧	肯・顧	肯・顧
誰・之	誰・之	誰・之	誰・之	誰・之	誰・之
永・号	永・号	永・号	永・号	永・号	永・号

五四言句 〈返点割愛〉

( 一 ) 典拠成句

- ① 漱石枕流 ⑥ 螢窓雪案 ⑪ 疑心暗鬼 ① 小心翼翼
- ② 守株待( ) ⑦ 鷄鳴狗盜 ⑫ 一挙兩得 ② 戰戰兢兢
- ③ 「蛇足」(酒) ⑧ 夏鑪冬扇 ⑬ 五里霧中 ③ 偕老同穴
- ④ ・隆・書 ⑨ 快刀乱麻 ⑭ 草廬三顧 ④ 切磋琢磨
- ⑤ 尾生之信 ⑩ 羊頭狗肉 ⑮ 先憂後樂 ⑤ 多士濟濟

( 二 ) 空欄に一字入れよ。

春季

夏季

秋季

冬季

- ① 春眠( ) 覚 ① 芙・( ) 発 ① 秋信( ) 聞 ① ( ) 牀慵起
- ② 花( ) 多雨 ② 大暑( ) 蒸( ) 未至・霜( ) ② 寒( ) 重衾
- ③ 山花欲( ) ③ 三伏( ) 峰 ③ ( ) 風皓( ) ③ 寒( ) 滿天
- ④ 鶯( ) 花紅 ④ ( ) 年佳節 ④ 白月清( ) ④ 孟冬( ) 冷
- ⑤ 桜花( ) 発 ⑤ 梅雨不( ) ⑤ 月( ) 把杯 ⑤ 紛紛雪( )
- ⑥ ( ) 春山野・ ⑥ 薰風種( ) ⑥ 秋風吹( ) ⑥ 蟋蟀在( )
- ⑦ ( ) 融冰消 ⑦ 緑( ) 紅瘦 ⑦ 無( ) 秋風 ⑦ 明且( ) 年
- ⑧ 梅花馥( ) ⑧ 水上( ) 涼 ⑧ 雁来( ) 去 ⑧ 冬夜( ) 書
- ⑨ ( ) 連日新 ⑨ 薔薇滿( ) ⑨ ( ) 山紅葉 ⑨ 凍雨( ) 天
- ⑩ 万木生( ) ⑩ 炎天汗( ) ⑩ 柑子未( ) ⑩ 今歳( ) 除

「詩經」